

感染症が収束してもマスク生活をする人の存在

新型コロナウイルスの影響でマスクの着用を強いられる生活が続いている。マスクは外部からのウイルスを体内に侵入するのを防ぐだけでなく、自分の体内に潜んでいるウイルスを他の人にうつさないために使用される。歴史的背景として、感染症の流行に伴い、日本政府が国民にマスクの着用を呼び掛けたことから日本人は欧米人よりマスク着用に対する抵抗が少ないとされている。その結果生まれたのが「マスク依存症」である。

渡辺登 (2018) によると、2003 年 SARS の流行以降、マスクの着用が社会的に認められたことで生まれた依存症である。対人関係で不安を抱きやすい社交不安症に陥っている人がマスクを着用することで、不安や緊張の表情を見せず、他人との接触を避けるなど手段としてマスクが使用される。また、マスクを着用するプロセスに安心感を得る場合など、依存理由はいくつか考えられている。マスク依存症の人にとってマスクとは感染予防の道具ではなく、自分の姿を隠す道具である。現在の状況が落ち着きマスクの着用が義務でなくなっても使用し続ける人は一定数いると予想される。インターネットの進歩により、人と直接交流する機会が減っているなか、マスクに依存することは他人との交流の調節能力が低下しているとも言える。社会全体でこれからのコミュニケーションの在り方を考える必要がある。

参考文献

渡辺登 (2018). マスク依存. ストレス科学研究. 33, 15-20. Retrieved from https://www.jstage.jst.go.jp/article/stresskagakukenkkyu/33/0/33_2018006/pdf

(文学部英文学科 3年 三輪明香)

壁一枚

「目は口ほどにものを言う」と、昔からよく言われている。「情のこもった目つきは、口で話すのと同じくらい気持ちを表現する」という意味であることはご存じの通りである。会話相手の顔が目元を除いてほとんど見えない昨今、まさに実証実験中だともいえる。しかし、実際に見えている「目」だけで感情が分かるのかというと、どうも上手くいかない。

そもそも、表情の感じ取り方は世界で異なるらしい。日本人は目を、欧米人は口を中心に感情を読み取るという研究結果がある。それがマスクの着用にも関係しており、もとよりマスク文化の日本と違い、欧米の人はマスクへの抵抗が大きいそうだ。日本人が、サングラスの人を少し怖いと感じるのと同じようなものだという。

それなら、日本人は他国に比べて現在のマスク生活に順応できているはずだが、それでも

わかりにくいことに変わりはない。目は表情による動き・変化が小さいため、口元よりも相手の感情がくみ取りづらい。そのため、こちらの感情が伝わっているのか心配になる。マスクを常につけるようになって1年半ほど経つが、未だに慣れたとは言いがたいままだ。

昨年と比べて人と会うようになった現在でも、マスクによる人との関わりの薄さは続いているように感じる。ことわざの通りにはいかないし、布一枚の隔たりは厚い。

(生命医科学部医生命システム学科 3年 福島有紀)

マスクを外すと印象が違って見えるのはなぜか

コロナ禍になってから、外出するときにはマスクが必須となった。マスクの下に隠れた顔を見る機会は少なくなり、マスクをしたときの顔しか知らない人もいる。その人がマスクを外したとき、「あれ？こんな顔だったのか」と思うことはないだろうか。また、顔を知っているはずなのに、マスクをしていると印象が変わっていて、この人は本当にあの人なのだろうかと不安になることもあるのではないだろうか。

なぜマスクがあるときとないときで顔の印象が変わるのだろうか。これは、見えない部分に「理想」を当てはめて見ているからであると言われている。マスクの下には自分が理想とする顔が存在しているに違いない、と想像力をかき立てることで、プラスの評価を自然とつけてしまっているのだ。だからマスクを外したとき、印象が違って見えやすい。実際に、顔の一部分を隠した写真の方が、より魅力的に見えるという実験結果もあるほどだ。

最近、特定の条件下であれば iPhone の顔認証がマスクをつけていてもできるようになったことが話題だった。人間による顔認証システムの方が理想を押しつけるばかりで意外にも正確性が低く、コロナ禍に適応したアップデートができていないのかもしれない。

(生命医科学部医生命システム学科 3年 北川愛沙未)